

## いじめ場面における傍観者が被害者を援助するには

—公正世界信念の下位概念と自己効力感の影響に注目して—

野中りょう・森永康子

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

## 問題

本研究は、いじめにおける傍観者の援助行動に公正世界信念(BJW; Lerner, 1980)がどのように関わっているのかを検討する。BJWは、世界は公正、安全で、その人にふさわしいものを手にすることができる場所であるという信念であり、人々は信念維持に動機づけられていると考える。Lerner (1980)は BJW の信念維持方略として非難と援助の2つの方略を挙げており、Correia et al. (2016)は不公正を取り除くことができるという自己効力感(SEJW)がある場合は、被害者を助けるという方略をとることを示しており、ない場合は被害者への非難を行う可能性があるとしている。これらの先行研究の結果は、一般的援助行動に対してのものであり、いじめにおける援助行動では検討されていない。そのため本研究ではいじめにおいても同様の結果がみられるのかを検討する。また BJW の下位概念によって信念維持方略が異なる可能性があり(三浦・村山, 2015), 信念維持のために実質的・心理的努力を必要とする内在的公正世界信念(BIJ)が、SEJW の高い参加者の場合、援助と関連を持つと考えられる。そのため、本研究では、BJW の下位概念である BIJ と援助の関連について検討を行う。またいじめにおいて非難や援助に深刻性が影響することが考えられ、本研究では深刻性との関連も検討する。

## 方法

**参加者** 大学生 85 名(男性 59 名, 女性 26 名), 平均年齢は 19.18 歳, SD=1.52。

**手続き** 参加者と登場人物の性別を一致させたいじめシナリオを読ませ、その後、被害者非難(Gini, 2008 参考 4 項目,  $\alpha=.77$ ), 加害者非難(山田, 2001, 3 項目,  $\alpha=.81$ ), 援助行動(蔵永ら, 2008, 7 項目,  $\alpha=.86$ ), 深刻性(Bastiaensens et al., 2014, 5 項目,  $\alpha=.61$ ), BIJ, BUJ(究極的公正世界信念), 不公正世界信念(村山・三浦, 2015,  $\alpha>.86$ ), SEJW(Mohiyeddini & Montada, 1998, 8 項目,  $\alpha=.90$ )への回答を求めた。援助行動の項目のみ 5 件法, その他の項目は 6 件法で回答を求め、性別や年齢などを最後に尋ねた。

## 結果と考察

まず、全ての変数を用いて、相関分析を行ったところ、BUJ と援助行動に正の相関がみられ( $r=.34, p<.01$ ), この結果は先行研究から想定されるものと異なっており、そのため本研究では先行研究から想定される BIJ のモデルを検証するために BUJ を統制変数としてモデルに加えることとした。

上記のことを考慮し、年齢、性別、BUJ を統制し、共分散構造分析を行った結果(Figure1), 被害者非難に、BIJ と深刻性と SEJW の交互作用がみられた。交互作用について重回帰分析と単純傾斜検定による下位分析の結果、SEJW が低い参加者において深刻性を高く認知した場合、BIJ が高い参加者の方が低い参加者よりも被害者非難をする傾向にあることが示された( $\beta=.644, p<.05$ )。また加害者非難に深刻性の主効果、援助行動に、BIJ と SEJW の交互作用がみられた。下位分析の結果、BIJ が高い参加者において、SEJW も高い参加者は低い参加者に比べ、援助行動をする傾向にあることが示された( $\beta=.500, p<.01$ )。この結果は、いじめ場面における援助行動においても、先行研究(Correia et al., 2016)と同様の傾向がみられることを示したと言える。また SEJW の低群かつ深刻性を高く認知した参加者は BIJ が高いほど被害者非難する傾向にあったことから、被害者非難、援助のどちらかを信念維持方略として選択する際に SEJW が影響することが考えられる。

